

ハーディの

## 「キャストブリッジ市長」について

小山浩代

When she plodded on in the shade of the hedge, silently thinking, she had the hard, half-apatetic expression of one who deems anything possible at the hands of *Time and Chance* except, perhaps, fair play. (p. 2)<sup>1)</sup>

Time (時)と Chance (偶然)の手にかかれば、おそらく fair play (正しいこと)以外不可能なことはあるまいという考え——。Hardy の作品は、過度に「偶然」の働きを借りて plot の展開をはかるために、読者にしばしば不自然な感じをあたえるということは、よく指摘されることである。しかしこの偶然性が作中にかもし出す説明不可能な不自然さこそ、作家 Hardy の世界観・人生観にあっては、人々に人間の本性を目覚めさせる契機として何より重要な要素となっている。従って単なる偶然としてではなく、作者の入念な構想のもとに、あらかじめ予定されていた筋書として、作品に大きく貢献する例は、他の代表作、*The Native*, *Tess*, *Jude* などに顕著にみとめられる。この *The Mayor* について、批評家の中にはこの偶然という要素が、極端に人物をもてあそぶ場面が多すぎるという理由から、作者は自分の哲学・思想を表現するため、故意に現実を無視して作品をつくりあげたのではないかと酷評する人々もいる。しかし、人間の目からみたとときそれは偶然の様相をみせるだけであって、Hardy の世界観の中では「必然」(Necessity)と同意語であると考えられることもできる。彼は十九

世紀の主だった科学思想を理解する一方、伝統的キリスト教のような信仰をもつ人々をうらやみ、神を求めつづけたけれども、生涯ついに神を見出すことができなかつたことを自ら語っている。やがて二十世紀文学へとなだれこむことになる科学的世界観の中に、すでに多くの悲劇的の矛盾を感じとっていたのであった。この宇宙を支配する力は「神」と同一視することのできない、合理性なしに働く盲目的意志であると彼は考え、この力にいろいろな名称を与えた——“the Immanent Shapes”, “the Unknowable”, “the Mighty Will”, “the Prime Volition” 等<sup>3)</sup>。そしてこの意志のために人間は幸福を奪われ、悲劇が展開されると考える。この悲劇的神秘性を彼は、終生みつづけたのであり、彼の作品は、主人公が、偶然性にみちた宇宙でとる行動と、結局彼をおしつぶすことになる運命との関係に、何かしら意味を与えることであった。

このような意志の働きは、偶然性と同時に人物の「性格」という形であらわされる場合があり、*The Mayor* の、主人公 Henchard がその典型である。作者自身、この作品の Preface でこう述べている。

The Story is more particularly a study of one man's deeds and character than, perhaps, any other of those included in any Exhibition of Wessex Life.<sup>3)</sup>

*The Life and Death of the Mayor of Casterbridge: A Story of A Man of Character* という title を持つこの作品は、正にある性格をもった男の人生を追求した物語であるが、この性格によってひき起された悲劇の中に、人間に共通した運命をえがくところに作者の意図があり、何を悲劇としてとらえようとするのか、それが作品の意味をさぐることになる。

‘A Plot, or Tragedy, should arise from the gradual closing in of a situation that comes of ordinary human passions, prejudices, and ambitions, by reason of the characters taking no trouble to ward off the disastrous events produced by the said passions, prejudices, and passions.’<sup>4)</sup>

これは1878年の日記であるが、すでにこの内容は、彼の determinism の思想が転換しつつあることを示している。宇宙の内在意志 (the Immanent Will) は人間の外界から働きかける性質から、character の世界に存在するという考え方にうつり、*The Mayor* の悲劇性をあきらかにする鍵として注意したい内容である。

作者はこの小説の中で Novalis の引用として、“Character is Fate” (p. 131) と語っているが、ここではっきり性格というものが人間の心に深く根ざした運命的なもの、人間を翻弄する源泉として考えられているのである。主人公 Henchard は “who knew no moderation in his requests and impulses” (p. 88) と描かれ、感情に走りやすく、非妥協的、強情で傲慢、猜疑心と嫉妬心がつよい反面、情に脆いという性格の持主で、この性格が、「偶然」のもつ不可抗力の影響のもとで、彼の行動を決定して、一步一步、窮地へおとし入れてゆくことになる。彼の変転きまわりない運命は終始その性格と結びついているといえる。Farfrae を無理に引きとめて自分の競争相手をつくったり、呪術使いの占いを軽々しく信じて破産を招いたり、Newson におろかしい嘘をついたりする場合、その源泉は彼の自己中心的な性格にたどることができよう。この強烈な気質は、一般的道徳規範からみて決してすぐれたものではない。その不倖な性格に彼じしん、死に直面するまで気付かず、運命の過酷な仕打ちを経験しつつ、周囲の人々との関わり方において、同じ型の失敗をくりかえしてゆく。“The movement of his mind seemed to tend to the thought that *some power was working against him*”. (p. 219) と Hardy は書いているが、この小説では、character の心理的な説明・分析はかなりひかえてある。英国の小説が、人間の心の奥底にひそむ、行動の源泉をたどり表現することを伝統としている点から観ると、Hardy の少なくとも *The Mayor* は問題を残す作品ともいえる。しかし、作者は物語の発展、plot の展開にのみ創作意欲を傾けたのではない。小説のおわりの方で、“Susan, Farfrae, Lucetta, Elizabeth-Jane—all had gone from him, one after one, *either by his faults or by his misfortune*”.

#### 4 小山浩代

(p. 341) と説明されているが、彼の行動そのものが運命になるのは、彼の fault でも misfortune でもないと考えることもできる。この宿命的な人間像を表現しつつ、通俗小説とならないのは——これは他の作品の場合にも考えられることであるが——主人公の自己破滅の限界にたつて死（自ら選んだ死、不自然な不合理な死いずれの場合にせよ）を前にしたとき、自分じしんを客観視し、自分にたいする執着から解かれて「解脱」という魂の深みを悟る恩恵によくするからである。自分じしんの運命をありのままにみつめ絶望という人生否定の状況から逆説的に人生の意義を確信し肯定するのである。死を前にして、人間的であるということは、ただ一人たたされることであるという認識、ここに至って Henchard は現代の悲劇的主人公の資質をそなえるのであるが、そこまでに到達するのには、惨めな敗北の一生という苦悩が、代償として必要であった。

次に Hardy の他の作品と比較対照したとき *The Mayor* の特徴が一層はつきりしてくるであろう。代表作の大部分において、Hardy は、環境と遺伝の問題を中心とする見方から人物を説明するが *The Mayor* の場合、そのような見方からの描写は殆んどみられない。社会環境、時代背景も必ずしも作品にあらわれたものに限る必要はないのも当然である。

“—the scene for that matter being one that might have been matched at almost any spot in any county in England at this time of the year; a road neither straight nor crooked, neither level nor hilly,…” (p. 3)

とあるように、客観的な距離をおいた視点から平静に作者は筆をすすめる。何事が起ころうとも、またいかなる社会的条件が働きかけてこようとも、問題は character であり、又、特定の時代ではなく、いつの時代からも観る必要のあることをあらわしている。その性格は天性のもので説明しきれないままに残るにしても、Henchard の社会的・道徳的・精神的孤立は、彼自身の行ないの結果であり、それ以上に彼の nature のもたらすものであった。先に述べたようにしばしば Hardy は環境と遺伝を強調するのであるが、*The Mayor* ではあきらかにそのような要素を無視しているのは、

作者の意図が、単なる character の分析以上のものであることをものがたっている（もちろん各所で character のもたらす effect の分析はなされているけれども）。そして Henchard の性格は、物語の始まったときから二十年経っても変化することなく、以前と同じ状況にとどまっただけで、人生のさまざまな経験から何一つ学ぶことのできない人間像をつくりあげている。

主人公が何を考え何を感じているのか読者は殆んどわからないままに置かれている。それは作者の意図が登場人物の深い感情の動きを洞察することではなく、彼らの運命の前提となる situation を設定することだけにあるからである。いいかえれば、人間をある状況に置くことである。読者は直観的にその意図を知ることができるほど、その手法は徹底しているように思われる。

たしかに plot を展開する上で Hardy は英国小説の歴史の中で、難しい時代に立っていたことはみとめなければならない。Victoria 朝文学の伝統をそのままに受け継ぐのでもなく、また、それをうちやぶるところまでもいたらなかった点においてである。彼の小説における plot は、人間の situation を鮮明にするために必要なものであるが、その situation の意味は、運命の過酷さ、苛烈さを創造し伝えるために是非必要なものであった。Wessex 地方へ妻子を連れてきた Henchard はある日、酒の上の衝動から妻子を見知らぬ男に売り渡してしまう。これが最初の設定である。この Henchard を中心に、物語を構成するために、彼の周囲に登場する人物は、性格描写の上から、特別の注意がはらわれている。しかも主人公と対照的な特徴をそれぞれそなえた人物に描かれている。妻 Susan は “...far from exhibiting surprise at his (=Henchard's) ignoring silence she appeared to receive it as a natural thing.” (p.2) という表情で、夫のあとについてゆく。せりにかけられてもただ、“She bowed her head with absolute indifference.” (p.11) と描かれ、いよいよ売られてゆくときになっても、“Then dropping her eyes again, and saying nothing, she took up the

child and followed him...” (p. 12) と無関心と服従に終始する。

Elizabeth-Jane は Hardy の性格でもあったところの、人生に対する無欲な態度と人に思いやり深い忍耐強い性格をもち、Henchard の余りに一途な激しい生き方をもたたびたびやわらげなだめる境地を開いている。

“She had learnt the lesson of renunciation, and was as familiar with the wreck of each day’s wishes as with the diurnal setting of the sun. If her earthly career had taught her few book philosophies it had at least well practised her in this. Yet her experience had consisted less in a series of pure disappointments than in a series of substitutions. Continually it had happened that what she had desired had not been granted her, and that what had been granted her she had not desired. So she viewed with an approach to equanimity the now cancelled days when Donald had been her undeclared lover, and wondered what un-wished-for thing Heaven might send her in place of him. (p. 205) / “...Elizabeth-Jane, being out of the game, and out of the group, could observe all from afar, like the evangelist who had to write it down:...”. (p. 208)

どの様な思わぬ不運にみまわれても彼女はつねに平静な態度を失うことがない。Henchard は妻子競売の事件から十八年たったとき、二人に再会するが、そのあと、冷酷な運命の悪戯につぎつぎ苦しめられる。世界は彼に対していつも非情である。

Farfrae は “See now how it’s ourselves that are ruled by the Powers above us! We plan this, we do that...” (p. 280)

と瞑想にふけるように思わず独りごとをつぶやく。人間がどれ程真剣に自分の意志を達成しようと試み努力してみても、否、そのようにつとめればつとめる程、思いもかけぬ結果が生じてくるのはあまりにも明白な現実である。このことをみれば、どのように行動してみてもふりあてられた運命や苦しみを避けることはできないこともおのずとみとめられることであろう。最悪の事態を冷静にみつめる勇氣はそのような行動と経験を重ねて

はじめて人の心に生れるものであり、そこには一種の救いがあり、少なくとも、もはやあやまった期待や希望に beguile されることはなくなるのである。“...so it must be.” (p. 384) という言葉にも安堵さえ感じられるのであるが、Elizabeth-Jane や Susan には早くから、そして 絶えずこの意識がながれているのにたいして、主人公はそこまでに心が開かれるまで、一生運命にはげしい挑戦をくりかえさねばならない。近代人らしい教養・文明・知性とは全く無縁と思われる原始人的はげしい気質は、容易に自己崩壊と破滅をまねく。そしてどのような苦悩・失敗も不倖と感ずることなく、ひたすら自己に忠実であろうとする egoism を助長させるものである。

Henchard の一生は冒頭の wife-selling の行為に始まる罪の意識によって、意識的にも無意識的にも支配される。自分の罪を深く感じ悔い改めようという良心もときにはみせる。

“When he was calmer, he turned to his original conviction that he must somehow find her (=his wife) and his little Elizabeth-Jane, and put up with the shame as best as he could. It was of his own making, and he ought to bear it. (p. 17)

しかしそれよりも過去からどうしても逃れたい気持が先にたつ。この過去の行ないは、彼を自由にするはずはなく、つぎつぎに亡霊のように姿をあらわしては、彼を孤立した疎外された状況へとかりたてるのである。

まず第一に、かつて売りわたした妻と娘が二十年ちかくたって、あわれなすがたで彼の前にあらわれたときから、不吉な運命の復讐が彼を悩まし始める。この間に彼は成功して富を貯え Casterbridge の市長という名誉ある地位にまでのぼっていたが、当然過去の亡霊に責任をとらねばならない。そこで Susan といさぎよく結婚、Elizabeth を養女にすることに決心する。それは彼の愛情がうながした人間らしい決心ではなくて、三つの大きな決意によるものであった。

“...nothing but three large resolves—one, to make amends to his neg-

lected Susan; another, to provide a comfortable home for Elizabeth-Jane under his paternal eye; and a third to castigate himself with the thorns which these restitutory acts brought in their train;....” (p. 95)

ここで第三番目にあげられている self-castigation の働きは、のちに、Elizabeth-Jane の実の父親があらわれたときもっとも手ひどく彼を痛めつけることになる。

Henchard がこのような形で過去の償いをしはじめて間もなく、妻 Susan が亡くなり、それ以後、彼をとりまく現実次第に暗く不気味に動いてゆき、物語は性格悲劇から運命悲劇にかわって展開する。Susan の死の悲しみと淋しさから、彼が Elizabeth-Jane に、過去のいきさつと自分が彼女の父であると打ちあけた直後に、ぐうぜん亡妻の遺書を発見する。そこには今の Elizabeth-Jane は Henchard の娘でなく、Newson の娘であることが記されている。平穏な日常生活にもどったのもつかのまに、彼の心の平衡は失われてしまう。

“Her husband regarded the paper as if it were a window-pane through which he saw for miles. His lip twitched, and he seemed to compress his frame, as if to bear better. His usual habit was not to consider whether destiny were hard upon him or not—the shape of his ideas in cases of affliction being simply a moody ‘I am to suffer, I perceive’. ‘This much scourging, then, is it for me?’ But now through his passionate head there stormed this thought—that the blasting disclosure was what he had deserved.” (pp. 143-144)

それでもなおこの blasting disclosure できえ自分に当然のものという思いがのこるだけであった。

“Misery taught him nothing more than defiant endurance of it. His wife was dead, and the first impulse for revenge died with the thought that she was beyond him. He looked at the night as at a fiend. Henchard, like all his kind, was superstitious, and he could not help thinking



that the concatenation of events this evening had produced was the scheme of some sinister intelligence bent on punishing him. Yet they had developed naturally. If he had not revealed his past history to Elizabeth he would not have searched the drawer papers, and so on.” (p. 144)

決してつぐないのつかない Henchard の過去の行ないは、彼に人間らしい、misery の感情を起こさせることすら拒み、挑戦的に耐えることを課する。妻が亡くなって手のとどかぬところに居るとおもうと、復讐心さえ消えてしまう。一連の皮肉な出来事は、悪意のある霊が彼を罰するべくたくらんだかのように彼に思われて仕方ないのであった。しかし、Hardy は “Yet they had developed naturally.” と語ることを忘れない。この idea は他にもくりかえし出てくる注意すべきものである。（“—if anything should be called curious in concatenations of phenomena wherein each is known to have its accounting cause.” (p. 235)

Hardy の創造した人物たちは、Henchard にかぎらず、人生から学びとるといふ恵みにあずかるのがつねに遅すぎる。Susan 母娘が、Casterbridge へやってきてから徐々に Henchard の運命をかえる何か働いているように思われる。ある年、小麦の不良品を売ったため町の人々からの非難にさらされていたとき、たまたま通りかかったスコットランド生れの青年 Donald Farfrae が、小麦の品質を改良して彼の危機を救うが、この青年を引きとめ使用人としてすることから、はからずも自分の競争相手にしてしまう。Farfrae の小説の中での役割は、まさに “the reverse of Henchard” であって、性格はおだやかで沈着、あるときは冷淡とおもわれるほど理性的であるが、人々にしたわれ、Henchard のもとから独立してゆく。性格の長所と秀でた商才から成功して、Henchard と争うことになる。Henchard は少しでも Farfrae に先んじたいばかりに呪術使の言葉を信用して思惑買いをすると、天候が予測をはずれ手ひどい損害をこうむる。収穫まぎわ、急落した小麦を Farfrae が買い集めたあと好天が再び一変して収穫は期待

をはずれ、Farfrae は Henchard に代わって財を成す。物語がすすむと Henchard の失うすべてのもの——財産・Mayor の地位・娘 Elizabeth-Jane——が Farfrae の手中に入る。

主人公につきまとう過去は、次に wife-selling の場面を目撃した老婆の出現によって決定的な衝撃をうけるのである。まだ judge の職にあって、Henchard が罪に問われた一人の老婆を裁くため法廷にあらわれると、彼女は彼を想い出して、彼の過去を公衆に暴露してしまう。この法廷事件以来、主人公の運命は、急速に転落してゆく。この場面は、作者が好んで用いている偶然の手法であり、*The Mayor* の中でも特に引合いに出される場所である。いかにも小細工をほどこした作りごとめいた感じを読者にあたえることもたしかであるが、作者自身、作品が *The Graphic* に連載されるようになったとき、「思ったほどよく書けていないかもしれないが、性格 (character) が本当らしければよいのであって、事件 (incidents) の improbabilities は問題ではない」と日記に書いている<sup>5)</sup>。Hardy の長篇小説は大部分、連載の形で発表されて、一回ごとに sensational な事件をもちこむ必要上、作者の創作意図に反して物語を作りあげたという解釈も可能であろうし、事実そういう例はいくつかははっきりしている。( *The Return of the Native* につけた作者の註は有名である。) しかし作家としてそれ以上に主人公が運命の皮肉な働きに立ち向い錯綜する事件に出あって破滅に向って戦い続ける有りようを書きたかったと考えたい。

社会的にすっかり信用を失い、競売に付された財産は Farfrae にわたり、Henchard はこの町へやってきた時と同じ一介の乾草刈人に没落して、片意地な性格のため人々を拒絶して、騒々しい Casterbridge の世界から孤立した存在になる。健全でひかえめな精神の持主である Elizabeth-Jane 一人が、そのような彼をなぐさめかばい、彼にとって唯一の生きる目標であるようにみえた。そこに Elizabeth-Jane の実の父親 Newson があらわれて、彼の最後のよりどころまで奪い去ろうと試みる。彼は Newson に Elizabeth-Jane は死んだと偽り告げて自らを裏切ることになる。主人公は、

たびたび過去の呪いをうけてきたが、その不倖を教訓とすることを知らな  
いまま、耐え難い負目を感じないように Casterbridge を離れる決心をする。  
これ以上 Elizabeth-Jane の幸福を妨げるべきでないことを悟り、彼女には  
自分の行なったことについての償いの気持もあらわさず、また申し開きも  
せず、彼女と Farfrae の結婚の日に別れを告げる。

This was enough to set Elizabeth thinking, and in thinking she seized hold of the idea, at one feminine bound, that the caged bird had been brought by Henchard for her as a wedding gift and token of repentance. He had not expressed to her any regrets or excuses for what he had done in the past; but it was a part of his nature to extenuate nothing, and live on as one of his own worst accusers. She went out, looked at the cage, buried the starved little singer, and from that hour her heart softened towards the self-alienated man. (pp. 379-380)

ようやく他の人々との関わり合いを絶つ決心がついて一人さまよい出た  
荒涼とした Edgon Heath で、鉛筆書きの遺書を残し、悲劇の主人公の役  
割を演じ終わるがこのような死こそ彼の一生の終わりにふさわしいものと  
作者は語っているようである。

‘That Elizabeth-Jane Farfrae be not told of my death, or made to grieve on account of me.

‘& that I be not bury’d in concecrated ground.

‘& that no sexton be asked to toll the bell.

‘& that no body is wished to see my dead body.

‘& that no murners walk behind me at my funeral.

‘& that no flours be planted on my grave.

‘& that no man remember me.

‘To this I put my name.’ (p. 384)

遺書から読者は、主人公が illusion から解放され、人生を、そして自分  
を公平にみる境地にいたったことを知るのである。冷静に、客観的に、彼

をとりまく人々すべてを、さらに自分自身さえも、不運な人生という drama の役者として眺めることができるようになったことを。生きていたものを全てあきらめ、あらゆるものを外からながめる心境に到達し、自分の運命の inevitability を認めている。Hardy の主人公たちは、死に向いあったとき、この世からあとかたなく消えたいという最後の願いをいただくのがしばしばであるが Hardy は1887年ある手紙の中でつぎのように記しており、彼の死生観を考える上で注意したい一節である。

As to despondency I have known the very depth of it. You would be quite shocked if I were to tell you how many weeks and months in byegone years I have gone to bed wishing never to see daylight again.<sup>6)</sup>

Henchard の遺書は、彼が運命に敗北したことを静かに認めざるを得なかった証しであるが、彼の一途な性格は彼のみならず、周囲の彼と関わりある人々すべての運命と直結して一つの悲劇を完成させ、作者の意図も達せられたのである。Hardy の作品の中でも *The Mayor* ほどさまざまな理由から評価のわかれる作品は少ないが、F. R. Southernington が Hardy の悲劇について述べていることはそのまま *The Mayor* に適切な解釈を与える内容であり引用しておく。

The tragedy, often, in Hardy is the destruction of personal aspirations because they arise in an environment which is unsuited to their fulfilment, and the tragic action consists of the struggle to escape from the necessity of adaptation. In 1885 Hardy stated that tragedy 'exhibits a state of things in the life of an individual which unavoidably causes some natural aim or desire of his to end in catastrophe when carried out.'<sup>7)</sup>

## 注

- 1) Text, Thomas Hardy; *The Life and Death of the Mayor of Casterbridge: A Story of a Man of Character* (The Greenwood Edition), Macmillan, 1971.
- 2) J. O. Bailey; *The Thomas Hardy and Cosmic Mind*, The Univ. of North

Carolina Press, 1956, pp. 93-94.

- 3) *The Mayor*, p. iv.
- 4) F. E. Hardy; *The Life of Thomas Hardy 1840-1928*, Macmillan 1965, p. 120.
- 5) *ibid.* p. 233.
- 6) F. R. Southerington; *Hardy's Vision of Man*, Chatto & Windus, 1971, p. 28.
- 7) *ibid.* p. 233.

(筆者は本学講師・英語)